

地域固有の価値を見つめ直す

最近、視点を変えることで再発見した事例を2つ書いてみたい。

1つは、この冬から最上川で川舟を操るようになってから気がついたこと。川から風景を見るが多くなった。川の水面から見る風景は、人が住む集落やそれを囲む田んぼなどの農地は前面に見え、その背景に丘や里山、さらにその奥に高い山々を望むことができるというものだ。いつもは上から見降ろすことの多い最上川だが、逆に水面から村々を仰ぎ見る風景は、ちょうど世界地図を反対にしたときに感じる感覚に似ていると言ってよいだろう。山々を水源とする沢に沿うようにして、森や田んぼや集落が形成され最上川に注ぐという、人と自然が織りなしかつながら作り上げた美しい原風景の姿がここにはある。だが、その美しい風景もよく観察するとところどころにほころびを認めることができる。集落の裏手の山々はナラを中心に枯死し始めているし、山々から集落にかけての棚田は上流から順番に放棄され荒れ始めている。川と集落のつなぎ目は人工物で段差ができて分断されているし、集落の家並みには歯が抜けるようにして空き家や空き地が散見される。徐々に均衡を失った姿へと変貌しようとしているさびしい村々の現状が見られるのである。かつて民俗学者、宮本常一が「自然はさびしい、しかし人の手が加わるとあたたかくなる」と言った。人の手が加わらなくなりつつある最上川河畔のムラを見て、その言葉が想起された。

2つ目は先日、最上川を題材としたフォーラムで、岩手大の山本信次先生の講演から視点を変えるような話があった。「集落とそこに住む村人の営みは、空間的には普遍ではない。だから科学として取り扱いにくい難点がある。しかし時間的には普遍と言えるのです」ということ。東北地方の村人が西日本に行って、東北と同じやり方で集落作りや里山の管理、農業をやってもうまくはいかないだろう。でも、同じ東北で、100年後同じやり方でそこに暮らし続けることはできるだろう。このように時代が変わってもその地に生存していけるための知恵や技術、持続可能な暮らしのスタイル、それこそがその地域固有のいわば「ムラの普遍性」だということである。

私たちはどこでも通用する価値を求めすぎではないだろうか。そのような「普遍的な思想」を追い求めることが、人と地域のつながりを薄れさせ、ムラの「さびしい」風景の遠因となっているように思えてならない。地元学の提唱者、水俣の吉本哲郎氏はこんなことを言っていた。「なんでこんなに地域の風景がつまらなくなってしまったのか。それは地域固有の思想・哲学・美学を創ってこようとしなかったからだ。なに、それは難しいことではない。その地域に生きていくために大事なことって何ですか、ということだ。これをその地に根差して暮らしてきたじいちゃん、ばあちゃんからよく聞くことから始めればいいのだ。」

時代とともにめまぐるしく変化する半面、世界中同じような風景が広がる都市では様々な歪が指摘されて久しい。しかし視点を変えれば、解決の答えの一端は地方の田舎(「ムラ」)にこそあるのではないかと思えてしまう。そのような発想からムラをもう一度歩いて見つめ直してみたい。そのムラ固有の暮らし方、他では通用しないかもしれないけど、そこで

しか通用しないものこそが面白かったりするのではないだろうか。もちろんそこにはその地域固有の問題ももちろんちゃんとあるのだ。こうしたことにきちんと目を向けることが、逆説的だが、普遍的に生きるために大切な「思想・哲学・美学」を創る基盤になるのではないだろうか。このことが激変する現代にこそ必要不可欠なものと思えるのである。